

聖書: ヨシュア記 13 章

説教題: まだ占領すべき地が

日 時: 2010 年 7 月 11 日

ヨシュア記は今日の 13 章から後半に入ります。これまでの 1~12 章ではカナンにおける様々な戦いが記されました。11 章の最後の節に「その地に戦争はやんだ」と記され、12 章ではヨシュアとイスラエルが打った王たちの一覧表があげられました。こうして一つの大きな仕事を成し遂げたヨシュアでしたが、13 章 1 節を見て私たちはビックリします。何とここに「ヨシュアは年を重ねて老人になった。」とあります。モーセの後継者としてつい最近バトンタッチされたばかりと思っていたのに！確かに 11 章 18 節に「ヨシュアは、これらすべての王たちと長い間戦った。」と記されていました。文字として読むだけなら、1~12 章は 2~30 分もあれば読めますが、実際には長い時間が経過していたのです。

そのヨシュアに主は「あなたは年を重ね、老人になったが、まだ占領すべき地がたくさん残っている。」と言われました。私たちはこれまたショックを覚えます。ヨシュアはこれだけ長い間、戦って来たのに、達成できたことは少しだったのか、と。このことは私たちも同じように人生をかけて主の力によって歩んでも、成し遂げられることはわずかでしかない！ということなのでしょう。そういうことではありません！そのことは 2 節以降の土地のリストを見ると分かります。そこで言われているのは大きく分けて 2 つの地域です。一つ目は 2~3 節の、イスラエルから見て南西部のペリシテ人の地を中心とする地域です。3 節にありますようにガザ、アシュドテ、アシュケロン、ガテ、エクロンといった有名な 5 つの都市がありました。2 節のゲシュル人の全土とは、さらに南の地域を指します。そして南端は 3 節にあるエジプトの東のシホルすなわちエジプト川。北端はペリシテ人の 5 つの町の一番北にあるエクロンの国境です。二つ目の地域は 4~6 節の北方の山地です。4 節最初の「カナン人の全土」とは、限定された意味で使われており、その具体的な地域が以下の「シドン人のメアラからエモリ人の、云々」という言葉で説明されています。そこから分かることは、これはイスラエルから見て非常に北方の地域であるということです。シドンとか、ヘルモン山とか、レバノンという言葉からそのことが分かります。このことから改めて知ることは、ヨシュアはカナンの中心部はやはり取ったのだ！ということです。これまで見て来たようにヨシュアは大きなことを成し遂げたのです！と同時にこのリストを見る時、私たちはビックリせざるを得ません。なぜなら、主が述べている地域は非常に遠い所にまで及んでいるからです。エジプトの東のシホルすなわちエジプト川までというのも驚きですが、5 節に北の端としてレボ・ハマテと記されています。ヘルモン山よりも北にあるダマスコの町よりも、さらにもっと北にある町です。つまり主のご計画は何と大きい！ということです。考えられないほどの地域がここに示されています。「まだ占領すべき地がたくさん残っている」との主の言葉は、ヨシュアが成し遂げたわざの小ささを語るものではなく、主のご計画の途方もない大きさを示しているのです。

果たしてこれは年老いた人には無茶な注文でしょうか。主は 6 節で「わたしは彼らをイスラエル人の前から追い払おう」と言っておられます。これまでもそうだったように、これからも主が先頭に立って彼らの戦いを導いて下さるのです。ヨシュアに命じられていることは、主に信頼して主の命令に従うことです。その具体的な方策はイスラエルの各部族に土地を割り当てることです。そしてそれぞ

れの部族がその地域に住んで、その地の支配を確かなものにし、さらにその支配を周辺の地域に広げて行くのです。第一段階の仕事が終わって、ヨシュアはこのように新しい段階の仕事に着手するように主によって導かれたのです。

さて、さっそくヨシュアによるヨルダン川西側の地の分割が始まるかと思うと、8節からのところにはモーセによってなされていたヨルダン川東側の土地の分配のことが記されます。イスラエルの部族に対する土地の分配はモーセの時代から始まっていたのです。ヨシュアはその仕事を引き継ぐのです。この経緯を明らかにするためにも、ヨルダン川東側のことから改めて記されているのでしょう。

さて、その東側に相続地を得たのは、ルベン、ガド、マナセの半部族です。彼らは非常に多くの家畜を持っており、ヨルダン川東側のギルアデの地は家畜に適した地であったので、彼らはかつてモーセにこの地を所有させて下さるようにと願い出ました。モーセはその願いを条件付きで受け入れました。すなわちこの2部族半の勇士たちも西側の戦いに出かけて行くこと、いやその先頭に立って戦うべきこと、そして西側の征服が終了したら、こちら側に戻って来て住むことができるということです。彼らは今やその仕事を成し遂げました。それで彼らは正式にその地を自分たちのものとすることができます。その範囲が9～12節に大まかに確認されています。南はアルノン川から、北はヘルモン山に至るまで。そして各部族の相続地が15節からもう少し詳しく記されます。最初はルベン族です。彼らの地域はアルノン川からメデバの台地を経てヘシュボンに至るまで。24節からはガド族の割り当て地です。彼らの地域はヘシュボンからヤボク川を経て、マハナインに至るまで。そして29節からのところにマナセの半部族の相続地が記されています。マハナインからバシヤンの王オグが住んでいたアシュタロテとエデレイを経て、ヘルモン山に至るまでの地域です。

この記録から私たちが学ぶことは何でしょうか。まずそれは、これが主の真実と恵みの記録であるということです。ここにはどのようにしてこれらの地が与えられたのか、思い起こすことができるように書かれています。特にシホンとオグのことが繰り返して述べられています。10節、12節、21節、30～31節。あのシホンとオグに勝つことができたということは、イスラエルにとって励ましの記録です。先週参照した詩篇136篇18～20節：「主は力ある王たちを、殺された。その恵みはとこしえまで。エモリ人の王シホンを殺された。その恵みはとこしえまで。バシヤンの王オグを殺された。その恵みはとこしえまで。」 また詩篇135篇10～11節：「主は多くの国々を打ち、力ある王たちを殺された。エモリ人の王シホン、バシヤンの王オグ、云々。」 このような主の真実が、この相続地のリストにもあかしされています。

しかし二つ目にこの記録には警告が含まれています。13節：「しかし、イスラエル人は、ゲシュル人とマアカ人を追い払わなかったので、ゲシュルとマアカとは、イスラエルの中に住んだ。今日もそうである。」 イスラエルは約束の地に定住することによって、神様の支配を徹底させて行くべきだったのに、それを十分になさなかったという記録がここにあります。これは彼らの失敗です。そしてこのようなコメントは、この後もしばしば出て来ます。イスラエルはヨシュア記前半の激しい戦いにおいては主に全く従いました。しかし相続地を得て気が緩んでしまったのでしょうか。平凡な毎日の中で、主に従う真剣さが欠けていたのでしょうか。これは読む私たちに警告を与えるものです。果たして自分は今、どうだろうか。彼らに似て、気が緩み、御言葉に従う生活を適当にしていることはないか。中途半端なところで満足し、主の御心からそれてしまっていることはないか。

そしてもう一つ14節と最後の33節にレビ部族のことが記されています。彼らがカナンの地に相続

地を持たないこともモーセの時代に決まっていました。彼らはイスラエルの民の礼拝生活に仕えるため、各部族の中に散らされるのです。彼らの相続地は主ご自身だと言われています。このことは土地が究極の祝福なのではないということを私たちに思い起こさせてくれます。それらを超えて、主ご自身を相続地とすることこそ本当の幸いである。もちろんこれはイスラエルに与えられたカナンの土地は意味がないということではありません。それは彼らに対する主の真実な祝福です。しかし大切なのは、それらを通して神へと目を上げること。レビ部族は現実の相続地を持ちませんが、最も大切な主ご自身を相続地として持つがゆえに、何も失ってはいないのです。そしてこれはレビ部族だけでなく、イスラエルの誰もが生きることのできる祝福です。詩篇 142 篇 5 節：「主よ。私はあなたに叫んで、言いました。『あなたは私の避け所、生ける者の地で、私の分の土地です。』」 73 篇 26 節：「この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし、神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。」

以上のことを受け継いで、ヨシュアは次の 14 章からヨルダン川西側の土地の割り当て作業へ移って行きます。ヨシュアはすでにカナンに住む多くの敵と戦い、彼らを打ち倒してきましたが、これからはその地にイスラエルの各部族が住み、神の御言葉に従う正しい生活を行なって、神の支配をさらに広げる歩みをして行かなければなりません。そうしてモーセの時代から始まったこの仕事を、いよいよ完成に向かって前進させて行かなければならないのです。

私たちが主によってすでに多くの恵みを頂いて来たかも知れません。たくさんの経験、祝福を味わって来たかもしれません。しかし私たちは自分の勝手な思いで満足し、今のところで止まってしまっ  
てはいけません。あとは自分取るべきところは何かのような思い違いをしてはならない。主は「まだ占領すべき地がたくさんある」と言われます。エジプトの東のシホルから、北方のレボ・ハマテまでと。こんな私にどうしてそんなことが可能か。体力的にも精神的にも私にはもう力がない、と思います。しかし主は、わたしが共にいて敵を追い払おうと約束下さっています。これまでも共にいて下さった主が、これからも共にいて、私たちの先頭に立って道を切り開いて下さる、と約束下さっています。私たちはこのようになお、さらなる祝福、さらなる信仰の高嶺へと招いていて下さる主の御声に聞く者でありたい。主は一人一人に、あなたには「まだ占領すべき地がたくさん残っている。」と語っておられます。その声に導かれて信仰の目を高く上げ、主が用意して下さるさらなる祝福を仰ぎ見つめて、主の御言葉に従う歩みへ進んでまいりたいと思います。